

研究ノート

観光と茶の湯に見られる非日常の洗練と成熟

—— 希求される「もう一つの日常」

Sophistication and Maturity of Leisure in Tourism and Teatism

竹鼻 圭子

Keiko Takehana

和歌山大学観光学部

キーワード：茶の湯、非日常、『茶の本』、想像力、涅槃

Key Words : Teatism, leisure, *The Book of Tea*, imagination, nirvana

Abstract :

Tourism in the 21st century is looking ahead to a focus on three factors, as Takada (1996) points out: imagination or curiosity, nirvana or desire for healing, and self-actualization in metamorphose. Teatism, or the way of tea, on the other hand, appears unchanged since its foundation. The aim of this paper is to clarify the coincidental features of tourism and Teatism, and to advocate the reformation and the utilization of both tourism and Teatism in the above mentioned meanings. Teatism (wabicha) was founded by Rikyu in the late 16th century. It was created to enjoy the aesthetic value of the utensils used, to experience the state of nirvana at leisure, and to reach a state of self-actualization through the world of Tea. *Nanporoku* was written to convey the basic idea of Rikyu in the middle of the 17th century. Okakura (1906) recognized the cultural value of Teatism and tried to convey it to the world. This was also accepted in Japan, and the status of Teatism recovered. The focus on the aesthetical value, however, has lessened the nirvana or healing facet of Teatism in its practical exercise. Thus the reformation of the practical exercise of Teatism is at stake.

1 はじめに——「もう一つの日常」としての非日常

観光は非日常の仕掛けとして語られる。茶の湯もまた非日常の仕掛けとして捉えられる。非日常は、日常にあらず、つまり日常の生活とは異なるもの、異質なものとして捉えられ、必ずしも火急の必要性が認められるわけではないということを含意する。一方で、観光や茶の湯は、純粹芸術や学問などの非日常の現象とは異なり、飲食や装いや居住空間の設えなど、日常に根差した要素を含んでいる。このことが時として観光や茶の湯が、遊興の具と軽んじられる社会的風潮を生んでいる。明治政府が明治6年(1873年)に茶の湯を「遊芸」として分類することに決定するということがあった。当時の裏千家家元玄々斎宗室や武者小路千家家元一指斎千宗守が、これに対し断固たる申し立てをしたことは有名なエピソードである。

しかし、観光と茶の湯の洗練と成熟をつぶさに考察するとき、現代人にとって欠くことのできない「もう一つの日常」としての機能を読み取ることができる。現代生活は、没入すべき

宗教的感情や、畏敬の対象となる自然環境から乖離されて久しい。それらに代わる充足を与え、日常を補完する「もう一つの日常」として機能する何か求められている。このことは、擬似的に充足されるバーチャルな世界や、薬物に依存する人口の爆発的增加にも明らかである。観光と茶の湯は「もう一つの日常」として機能するに足るところまで、洗練と成熟を経験している。現代に実現、再生させることが課題である。

観光は、石森秀三「観光革命と二〇世紀」(石森秀三、編、1996、pp.11-26)にもあるように、20世紀の交通通信手段の発達とグローバル化による、いくつかの革命的契機を経てきた。高田公理「観光の未来」(同p.229)は観光が描くべき未来の図式として次のような回路を提示している：①想像力(imagination)、もしくは広い意味での好奇心とその充足、②情報刺激の切断によるニルヴァーナ(涅槃)への願望=癒しへの志向性、③変容した自己の表出。そして、次のように述べて、観光が「もう一つの日常」として果たすべき機能は、現

代社会が希求して止まないものであることを示唆している。「こうした図式を提示することで、電子テクノロジーが提供するバーチャルな情報世界に沈潜しながら、いわば現実の観光の埒外に疎外 (avoid) されがちな現代という時代の情報遊牧民も、あらためて観光の埒内にとりこまれる。」

茶の湯が単なる遊興の具でないことは、岡倉天心 (覚三) (1906) の *The Book of Tea* (『茶の本』) において、日本文化の象徴として世界に紹介されたことにも明らかである。それ以前、16世紀の千利休による侘び茶の創造こそが、茶の湯を遊興と分ち、「もう一つの日常」として機能する仕組みが完成した契機である。利休の侘び茶は、現在の堺市にある南宗寺塔頭の一人、南坊宗啓が千利休に師事して書き留めた『南方録』(久松真一、校訂解題、1975) によく記録されている。そこに示された侘び茶の世界は、まさに高田の提示した観光の未来回路を備えた仕掛けであった。しかし、侘び茶も『茶の本』も必ずしも後世に正しく理解されることはなく、そのことが実社会での茶の湯が、遊興の具と貶められることにつながっている。

本稿では、非日常を超えて「もう一つの日常」として、現代社会が希求する機能について、観光と茶の湯の持つ可能性を明らかにする。それぞれの歴史的経緯と成り立ちを考察するなかで、その共通点が認知される。そこを出発点として、観光の未来と、茶の湯あるいは侘び茶の再生が展望され、社会の必要に応じていく方向を探る。

2 茶の湯の洗練と成熟

16世紀に完成したとされる日本の侘び茶は、中国で薬用であった茶が飲料として広まり、宋代に禅宗の喫茶儀礼に取り入れられたものが、日本に伝来したことが起源である。書院の茶を経て、当時の様々な文化的要素を総合して完成を見た侘び茶であるが、利休自身が目指していた創造性や涅槃の場や自己実現という要素が、当初より誤解を受け、その後も歪んだ理解と実践にさらされることになる。

侘び茶の成立の過程は、岡倉天心の *The Book of Tea* の冒頭に次のように簡潔に語られている。

Tea began as a medicine and grew into a beverage. In China, in the eighth century, it entered the realm of poetry as one of the polite amusements. The fifteenth century saw Japan enoble it into a religion of aestheticism – Teatism. (*The Book of Tea*, Chapter 1)

ここにいう8世紀というのは、唐の時代に陸羽が『茶経』を著したことを指している。そこには茶の木、茶の葉、茶器、点茶の方法などが書かれている。その頃までは、団茶を煮て点てる茶であったが、宋代になって、抹茶が用いられるようになり、茶筥で点てるようになった。また、道教の影響を受け

た南方の禅宗寺院において、点茶が儀式化された。これが日本に伝わって、後に茶の湯が成立することになる。中国ではその後の騎馬民族の支配の時代を経て、この儀式ばかりか、粉茶そのものが忘れ去られた。

日本には8世紀には茶が伝えられていた。9世紀初頭には最澄が茶の種子を持ち帰り、叡山に移したと伝えられる。宋代の茶は栄西によりもたらされ、茶の儀式とともに主に武士階級に広まった。栄西が源実朝に上程した『喫茶養生記』(1214) が流布したのである。明恵上人がその種子を京都梅尾高山寺に茶園を開いて栽培し、その茶が「本茶」とされた。

このように宋代の茶が禅とともに伝えられたことが、後に足利義政が大成した書院の茶から侘び茶の成立に至るまで、茶の湯の方向性を規定している。禅の僧堂で日々おこなわれる喫茶の作法が、型として受け継がれていくことになる。

侘び茶が目指したものが何であったかについては、次節で考察することとするが、侘び茶を完成した利休その人が、既に歪みを予見していたことが、『南方録』に記録されている。

接待に傾斜しがちな茶会を、利休が諫めた内容である。

近年、小座敷の茶すみて、又書院、あるひ四畳半などへ出て、茶よ菓子よと馳走すること始りたり、宗易の亭へ御成りのとき、かねて何々のかざり御覧あるべきとの御内意有て、小座敷御茶すみて、四畳半にて袋棚、書院にて臺子など段々御覧の事折々ありし也、しかるを御内意の子細をば人、しらず、小座敷過て、かならず四畳半か書院にて馳走せでハ、疎客の事かと心得、京・堺はしばしはやり出るほどに、備前宰相殿、浅野殿、宗及へ相談のよしにて、鑊の間とて別段に座敷を作事あり、毎々小座敷すみて、又此座にて會あり、此事を宗易伝え聞き給ひ、これ後世に侘茶湯のすたるべきもとめ也とて、わざと御兩所へまいり御異見申されし也、此御ハ御成の時も、小座敷なれば小座敷、書院なれば書院、とかく一日に座をかへてのかざり所作御断申されし也、(『南方録』棚)

茶の湯の愛好者が増える一方で、侘び茶の実践が歪んでいることについて将来を憂い、指導の方向を侘び茶に向けるように説いている。

只オソル所ハ、数寄ノ人世ニ多クナルホド、師匠モ多ク、口々ニ指南シテ、或ハ大名・高家ノ交リニハ、草庵ヲ書院ノゴト取サバキ、其本意ヲ尋ルニ不及、或ハ大食大酒ノ人ハ、草庵ニテモ酒盛ノ興ヲナシ、ソノ心々カナハザレバ侘ズキイヤニ思フ也、世ヲワタル師匠ドモ、大名ノ氣ニ入、茶ノ會長ズルヲ専ト心得、銀モチブゲン者ノコノコト好ムヲ幸トシテ、欲心ヨリススル茶ノ湯ナレ

バ、只今サヘ思ノ外ナルフルマヒ多シ、マシテヤ末代ノ茶思ヤラレテ不及是非、百年ノ後、フタバ生レテ、世間ノ茶成ハテタルアリサマヲ見タキコト也ト云々、(『南方録』減後)

また、遊興に走る茶の湯を嘆いて、後世に理解者が現れることを願っている。

十年ヲ不過、茶ノ本道捨タルベシ、スタル時、世間ニテハ、却而茶ノ湯繁昌ト思ベキ也、コトゴトク世俗ノ遊事ニ成ハテ、今見ルガゴトシ、カナシキカナ、宗易、和漢トモニ古来無之露地草庵一風ノ茶ヲ工夫シ、ヲソラク趙州ノ意味ニモカナフベキカナド、思フニ、末世ニ相應セズ、程モナク正道斷絶スベキコト口惜キコトナリ、二疊敷モヤガテ二十疊敷ノ茶堂ニ成ベシ、易ハ三疊敷ヲシツライタルサヘ、道ノサマタゲカト後悔ナル、トニカクカヤウニ思フモ茶道の執著ナリ、佛祖・聖賢ノ大道サヘ、時有テサカヘヲトロフ、イササカ悲ムベキカラズ、又末世出現ノ佛モ無キニアラズ、此道ニ於テモ得心ノ人後代ニ出来シ、御坊や休ガ志ヲ感通スルコトモアルベシ、サヨウノ人ニ一服ノ茶ヲ手向ラレタラバ、百年ノ後タリトモ、骸骨ウルホイヲ得、亡魂ナドカウケヨロコバザルベキ、(『南方録』減後)

ここにいう、末世にこそ侘び茶が復活するであろうという予言は的中し、2世紀半の後、幕末の幕政を担った井伊直弼が、小座敷の侘び茶をその原点の意味において理解した。『茶湯一会集』にかれの茶論が著されている。山折哲雄が「道元から利休へ—宗教と茶—」において次のように述べている。

直弼はあるいは茶頭・千利休の正統の継承者でなかったかもしれない。しかしこの一篇の作品によってかれは、利休の真髓を後世に伝える理念の継承者になったと私は思う。(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999、p.64)

利休の活躍した時代に、文化財思想というべき考え方も並立していたことも記憶すべきである。山折によれば織田信長の茶道具信仰は「茶礼」の意味を剥奪し、道元の「喫茶喫飯」の行われる仏寺そのものを破壊した。茶道具は一種の美術貨幣として社会的に認められ、人心を掌握し、大きな経済効果をもたらした。1つの茶入れが一国に値するという価値観が、一方では戦国乱世を治める機能を果たしたとも考えられるが、それは、茶の湯の目指した心の境地とは両極をなす考え方であった。

このような時代思潮の中で、千利休が太閤秀吉から死を賜った後、かれ自身が予見したように侘び茶は急速に本来の姿を失っていった。菱本芳明(2009)には『宗湛日記』に

ある山口玄蕃の茶会が取り上げられている。秀吉の唱導もあって大衆化された茶の湯が、本来の意義が希薄になり、うわべだけの見せかけに陥った様を、キツチュであると看破している。また、江戸時代の初めに橘實山の著した『壺中爐談』に次のように快楽に傾斜していった様子が語られている。

休の一派ますます断絶しぬ、此後、茶道おとろへ行ほとに、世の人、古田織部正重幸をもつて一時の師範とし、小坐敷の茶事によせて、上下・左右の睦ましを専とすれば、露地・草菴のおもかけを寫し、心ハ時世の興に應するを旨とせり、休居士の時ハ、乱世素朴の趣にて、草菴の侘おもしろしなとおもひしも、すてに治る世になりては、誰々も世の快樂にはなりやすく、飽まで食し、温かに着て、侘の興をこのます、故に古織もここをゆるへ、かしこをまかするほとに、草菴の意味大に違ひ、露地の要路はるかに隔れり、
(久松真一、1975、「参考文献篇」、p.412)

千利休以後、茶の湯がどのように捉えられ、実践されてきたのかということについては、熊倉功夫の「茶道論の系譜」(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999、pp.8-46)に詳述されている。熊倉は茶道の実態と時として矛盾する茶道論を、芸能論、茶禅一味論、分限論、趣味論の4つの切り口から多角的に論じた。

芸能性について、熊倉は林屋辰三郎氏のいう巡事性と結座性から説明している。結座性は、利休以前の武野紹鷗の茶会についての考え方である一座建立に表われていて、当時の文化背景として重要な連歌の影響が大きいとさる。また、利休の主張した一期一会とは一線を画す考え方であった。巡事性はむしろ江戸中期18世紀に成立した七事式に認められる遊芸の特徴であるとしている。熊倉自身は芸能性の要素として、①ふるまい、②よそおい、③しつらい、④おもひ、の4点を挙げている。①ふるまいは点前作法、②よそおいは十徳や茶道具、③しつらいは茶室と露地、④おもひは「わび」とされる。

茶禅一味論は茶の湯が禅寺院の儀礼を起源としていることから、常に茶の湯の精神性を支える論理として存在してきた。この考え方が、茶道論の主流とはなり得ないことは、熊倉の次の言葉がよく表わしている。

たとえ自力道であっても宗教的権威(カリスマ)への絶対服従を求める仏教と、権威にとらわれぬ自由な発想を喜ぶ茶道とは本質的に異なる。茶道は宗教ではない。
(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999、p.40)

分限論は封建社会の基本的な秩序の思想である。茶道でのこの考え方の果たした役割は、江戸時代の封建社会に

あって、身分秩序を破壊するとみなされた茶の湯の要素をカムフラージュし、茶の湯の存続を担保することにあつた。そこでは身分を顧みない茶の回し飲みや茶室や茶道具の設えは否定された。

趣味論は、封建制度が崩壊した後に、分限論に代わって展開された茶道論である。それを支えたのは近代数寄者と呼ばれる人々であつた。かれらは明治以後の近代日本の資本家や知識人のなかで、職業としての茶人ではないが趣味として茶の湯を愛好した。多くが富裕であり、茶道具が散逸することを、その富を持って阻んだ。後にかれらのコレクションが各地の私立美術館を誕生させた。

3 思索のトポスとしての利休の侘び茶

利休の言葉を借りれば、現代もまた末世である。幕末の井伊直弼同様に、利休の侘び茶の真髓を思い起こし、現代に蘇らせる契機なのかもしれない。渡辺保「茶事の演劇性」(戸田勝久、編、1999)は、演劇性を詳細に分析した結果、侘び茶を思索のトポスであると結論付けている。千利休が侘び茶に目指したものは何だったのか、『南方録』の記録を踏まえて考察する。

『南方録』には千利休の侘び茶の思想や理念が、かれの言葉として記録されている。以下にその真髓を表わすと思われる箇所をいくらか引用し、かれの目指したものを考察する。その多くは既に幾多の人々によって引用され、人口に膾炙してきた。しかし、周知のように、一般に行われている茶道の指導は、明治の婦女子の躰の流れを受け継いでいて、茶道の歴史や思想が教えられることはほとんどなかった。裏千家が2008年より茶道検定を実施し、主に茶道の歴史や茶道具に関する知識を総合的に広めようとの努力が始まっている。利休の言葉を単なる標語として理解するのではなく、理念と実践とが融合する方向が見出されて初めて、侘び茶が真の意味で継承される。

『南方録』は覺書、會、棚、書院、臺子、墨引、滅後の各章から構成される。引用箇所の章の名を付して出典とする。

利休は覺書の冒頭に次のように茶の湯を規定していて、この言葉がいかにも全てを語りつくしているようである。仏の道をたどること、つまりニルバナ(涅槃)を目指すのだと語られている。

宗易の云、小座敷の茶の湯は、第一佛法を以て修行得道する事也、家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事也、家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事也、是佛の教、茶の湯の本意也、水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、佛にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、ミナミナ佛祖の行ひのあとを學ぶ也、(覺書)

したがって、客と亭主の心得を問われて、自然な協同を理想としている。

易ノ云、イカニモ互ノ心ニカナフガヨシ、シカレトモカナイタガルハアシシ、得道ノ客・亭主ナレバ、ヲノヅカラココロヨキモノ也、未煉ノ人互ニ心ニカナハウトノミスレバ、一方、道ニチガヘバトモトモニアヤマチスル也、サレバコソ、カナフハヨシ、カナイタガルハアシシ、(覺書)

また、炉と風炉と、夏と冬の茶の湯の心得や極意を聞かれて、当たり前とも思える問答をして、自然の極致を説いている。

易コタヘニ、夏ハイカニモ涼シキヤウニ、冬ハイカニモアタカナルヤウニ、炭ハ湯ノワクヤウニ、茶ハ服ノヨキヤウニ、コレニテ秘事ハスミ候由申サレシニ、問人ノ不興シテ、ソレハ、誰モ合点ノ前ニテ候トイハレケレバ、又易ノ云、サアラハ、右ノ心ニカナフヤウニシテ後覽セヨ、宗易客ニマイリ御弟子ニナルベシト被申ケル、(覺書)

利休の大成した侘び茶は、草庵の茶の湯である。それまでの書院での台子の点前とは目指すものが異なつた。書院の点前はカネと呼ばれる、細かく規定された道具の位置関係が決めてられており、点前作法も厳格であつた。草庵の茶の湯は、書院の点前を原点としながら、能において守破離と呼ばれるような超越を求めていた。

カヘスガヘス茶ノ湯ノ深味ハ草庵ニアリ、眞の書院臺子ハ各式法儀ノ嚴重ヲトノヘ、世間法ナリ、草ノ小座敷、露地ノ一風ハ、本式ノカネヲモトルルトイヘドモ、終ニカネヲハナレ、ワザヲ忘レ、心味ノ無味ニ歸スル出世間法ナリ、カクイヘバトテ、壯年又ハイトマアル茶人、心味ダテヲシテ、知ベキコトヲ知ズ、取アツカイフツツカニテハ不相應ノコトナルベシ、實ハ事ト理ト別々ニアラズ、事熟スレバ心熟シ、心熟スレバワザ熟ス、ワザハ能スレドモ心イマダ至ラズト云ハ、ワザモイマダ妙處ニ至ラザルユヘ也、心ハ熟シタレドモワザ至ラズト云モ、心イマダ妙ニ入ザルユヘ也、コレ佛ノ道ニモフカク了會ノ一段ト云々、(墨引)

侘び茶において、利休が最も大切にしていたのが、火相・湯相である。つまり2時(約4時間)に及ぶ茶事の進行に火の強さと湯の煮え具合が相応し、自然な茶事の流れが生まれることを最も重視した。そこに亭主・客の息遣いの調和が象徴されると考えたのである。これを指して「一座一會ノ心」、後に井伊直弼によって一期一会と呼ばれた、茶の湯の極致とされる。

休ノ茶ハサホドマデ煅煉ノコトナレバ、茶ノヨキニミナラズ、服用シテマコトニ仙薬タルベシ感セラレシナリ、サテコソアサアサキヤウナル名ナレドモ、茶ノ湯ト云名、深々ノ道理ヲフクメルト知ベシト云々、ソレヨリマスマス此心ヲ專ニシテ見來レバ、炭ノ次第ヨリ始テ、一座一會ノ心、只コノ火相・湯相ノミナリ、(滅後)

また、茶事の理想の人数は2・3人とされた。目指すところが、単なる社交や遊芸ではなく、心一つにした涅槃の境地なのであれば、この人数は了解される。

小座敷ノ會、客五人ニ過ベカラズ、凡ハ二・三人ヲヨシトス、露地入・坐入・置合ヲ見ルナドノ隙入ニ、火相心得ザレバヒガゴト多シ、二・三人マデハ大方、程拍子ヨキモノ也、ソレサヘ主客未熟ナレバ、遅速ノベチヂメヲ知ズ、火相・湯相アシク成也、五人ニモ成テハ、客ノ立フルマイ手間入候ヘバ、火相散々ニアシク成也、(滅後)

同様に、茶事には欠かせない名物茶器についても、書院台子であれば、いくつかをかざることもあるが、草庵の茶の湯では名物は一つにするべきであると述べている。道具に関心が移ろうことを恐れての教えである。

草菴ノ茶ニ名物ノ道具出ス時ハ、必其外ノ道具新シキ物、又ハ古ケテモ、賞玩ラシク無キモノヲ用ベシ、臺子ニテハ、名物ヲ二種・三種モカザリ合スル、コレ結構ノコト也、草菴ノ氣味ヨクヨク心得ベシ、イロイロノコトヲ好候ヘバ、臺子ノ故實ニヨルトテ、イツナク草菴ノ所作、書院ノ心ニ成コトアリ、秘藏ノ茶入出タルト知ナバ、其外ノ物色々コイ出シ見ルコトアルベカラズ、只其一種ノ賞玩ノコト干要也、(滅後)

渡辺は井伊直弼の『茶湯一会集』から次の下りを引用している。先にも述べたように井伊直弼は『南方録』の思想を継承した茶人で、その記述も類似の箇所が多い。

腰懸ニ控たる内、相客同士咄候事、何方より、亭主承り居も不知、よくよくつつしみ、高声高笑、他にて有りし茶の道具の善悪等、今日之趣向ニ可障も難斗、咄間敷事也、

集雲庵七ヶ条第五・六

庵内・庵外ニ於て、世事之雑話、古来禁之、賓主歴然の会、巧言令色入へからず、濃茶点前中(略)勝手口法のことくあげ、茶椀三種仕込、左の手ニ持ながら、御茶を可進と、小聲に独言をいふ様ニ言ひて一礼、客よりも一礼あるへし、夫より運ひ出

し、濃茶点前、習ひのこし、客も、濃茶中ハミたりニ咄し不致、挨拶の外、無言たるへし、

渡辺はここにある「独り言をいふ様に言」ということを取り上げて、伝達を目的としない儀式性を指摘した。そして、そのような言葉が祈りでも歌でもなければ、人の内省をうながす意味を持っていると結論付けている。つまり、知的な空間としての茶室であり、思索のトポスとしての茶事なのである。

「独り言を云ふ様に言」言葉のあとには、一連の演出のなかで最も重要な濃茶点前がある。そこに「無言たるへし」とあって、沈黙がつづく。その間、人は釜にたぎる音、湯をそそぐ音、茶筥の音を聞くのみ。亭主は、そこで無私になり、おのれをむなしくして、想いに沈む。客また然り。茶の湯は見世物ではないから、その点前を見ても、目はその人の動作、身体を通して、その向こうの世界を見る。それが歴史であるか、人生であるか、社会であるか、思想であるか、それは、その人々の内面による。

人間が考えるのに、これほどの手の込んだことをしなくてもいいと思うのは間違いである。そういう自省の場所を与えられてはじめて人は自省するのだし、同時に何人かが共同で考えるということもある。それが茶会の意味だと私は思う。(戸田勝久、編、1999、p.204)

侘び茶あるいは茶の湯に見られる、ニルバナ(涅槃)を求める思索のトポスとしての機能は、茶の湯に限られたものではなく、広く日本文化に共通してみられることが、栗田勇の「茶道における諸法実相 座と寄合いの思想」(戸田勝久、編、1999、編、1999)に明らかにされている。

栗田はまず松尾芭蕉の『笈の小文』から次のように引用して、利休の侘び茶が和歌や連歌や水墨画に連なる文化として捉えられるとしている。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花あらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし

さらに、利休の茶の湯によって、西行、宗祇、雪舟の提示した世界が統合され実現したと述べ、唯一の諸法実相を求めそれと一体化する、すなわちニルバナ(涅槃)の境地を求めることこそ日本文化の核心であるとしている。

私は求道の人芭蕉が透視した日本人の精神文化の結晶として利休の茶のあること、また、それを受けて、

芭蕉が、俳諧の言語芸術を極限まで追求完成したことに心をうたれるのである。

要するに、日本の芸道とは、その道は種々あるが唯一の諸法実相を求めて、それと一体化する人生を求め道であり、日本仏教思想と溶け合うものであった。

ジャンルの差、方法の差よりも、目的の一致こそ日本の文化の核をなす志なのである。(戸田勝久、編、1999、p.268)

そして、栗田は日本文化の特質を、人類文化の「古代性」を、現代に至るまで、生きたものとして継承し、洗練し続けている点にあるとしている。「道」と呼ばれる、行動の規範となる倫理、そして、世界認識の「古代性」ともいえる、日本人の「自然観」が、日本文化に通低するというのである。

また、思索のトポスという時に、われわれ現代人が個人的内省をイメージすること、ひいては、茶の湯における複数が同座することとの違和感について、次のように述べてわれわれの疑問に答えている。

茶の湯の心を示す「和敬清寂」というとき、きわめて個人的内省的に考える近代的習慣にそまっている。(同、p.290)

したがって、茶室における亭主と客の関係についても、西欧的な個人的、対立的な関係ではないとしている。それは番(つがい)とも例えられるような、はじめから協力関係を前提とした分離であるとする。それは、文明論に及ぶ議論である。

和敬清寂は、そのような調和を予定して、対立者の緊張した空間の表現に他ならない。

西欧的発想には、このような、相補的關係から発する共生の論理はみられない。神と悪魔、自我と他者という明確な対立関係から認識が生まれ、その認識にもとづいて世界観が構成され、他者との相克と闘いによって運動と進歩がはじまるとされている。それを念頭において、日本の伝統的な座の思想をふりかえると、それがいかに独創的なものであり、かつ、いま二十一世紀をむかえるにあたって渴望されている発想であるかをいまさらのように痛感させられるのである。(同、p.291)

4 岡倉天心『茶の本』とその後

明治維新から約40年、日清戦争、日露戦争を経て、日本が、欧米列強の産業革命とそれに続く帝国主義に追随しようとしていた時、岡倉覚三(天心)は日本文化の真髄を伝えようとして、茶の湯にこそそれが代表されると、*The Book of Tea* (1906)『茶の本』を著した。天心は決して茶家でも茶人でもなかったが、そのことで、茶の湯を客観視できたと考えら

れる。天心の『茶の本』で試みた、茶の湯を通しての日本文化の世界での位置づけについては、田中秀隆「茶道文化論の構造」(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999、pp.136-172)に詳しく、後に議論する。まずは天心自身の言葉をいくつか、かれの意図するところを考察する。

天心はまず、茶道における審美主義と不完全の崇拜を取り上げている。

The fifteenth century saw Japan ennoble it into a religion of aestheticism – Teatism. Teatism is a cult founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of everyday existence. It inculcates purity and harmony, the mystery of mutual charity, the romanticism of the social order. It is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish something possible in this impossible thing we know as life. (Chapter 1, The Cup of Humanity)

松岡正剛は「数寄と編集の文化——文化を編集する茶の湯」(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999)において天心の取り上げた不完全性を、日本文化に通低するものとして次のように論じている。

岡倉天心は「茶の湯の要義は『不完全なもの』を崇拜するにある」と『茶の本』に書いた。が、不完全なものとは何かについてはふれていない。難しくいうのなら、不完全なものは満足の美に対するに不足の美のことをいう。しかし、この不足の美はむろん織部の茶碗などに快挙する場合もあるが、もっとおおまかで、いいかげんなところにフラクチュエートしているばあいもあった。『徒然草』などはむしろこのようないいかげんさを愛玩した。落丁や乱調をもちあげた。もつというのなら、不足の美は完全な美というものからの故意の逸脱であって、それは似顔絵などにもあらわれている遊び感覚そのものなのである。つまりは、本歌を感じさせる程度のもの、それを多少はずして表現しているもののことをいう。(pp.177-178)

次に天心は茶室での参加者の平等を次のように表現している。

It [the Philosophy of Tea] represents the true spirit of Eastern democracy by making all its votaries aristocrats in taste. (Chapter 1, The Cup of Humanity)

これは、ただ単に狭い躰から刀を抜いて入り、茶室では上下の区別がないことを意味するだけではない。松岡心平が「宴論——快樂の引用について」(熊倉功夫、田中秀隆、編、

1999)において指摘しているように、中世において盛んであった連歌会で、一座が「解脱の快味」を経験するという仕掛けを含蓄する。参加者は裸の個人となって交流し、高次元の精神的快感を得るとされる。

茶会のまっ只中に、連歌会で得られるような高次の精神的快感を見つけだすこと。ここから侘び茶の歩みがはじまった。連歌会の知的ゲームとしての様々な仕掛けを学び、盗みつつ。

そしてそのときの独創的工夫は、まず、精神的快感なり共同性の根拠を、空間として外側から規定する仕掛けを生み出すことだった。

珠光の四畳半は、そのような最初の発見であった。小間の空間、新しい質の空間を創り出すことにより、その中に精神的快感を得易い状態を現出させ、そこに無縁平等の共同性の根拠を見出そうとしたのである。

利休の待庵は、まさにこの空間の発見が最後に至りついた姿であった。

そして、もし利休が小間の茶室で濃茶のまわし飲みを新たに工夫したとすれば、それは、自分たちの茶寄合が、中世の一揆の共同体のような日常をも縛りしかも呪術に支配された共同体から離脱していることをよく知っている個人が、その共同体にはもはや帰れないことを知りつつも、いつかの共同のために愛惜をもって復活させた擬制の儀式あるいは趣向だったのではないだろうか。(p.103)

そして、天心は茶の宗匠が、自らを芸術そのものにしようとしていたと述べて、飽くなき可能性の追求、創造性を茶の湯に見出した。

Thus the tea-master strove to be something more than the artist?art itself. It was the Zen of aestheticism. Perfection is everywhere if we only choose to recognize it. Rikiu loved to quote an old poem which says: "to those who long only for flowers fain would I show the full-blown spring which abides in the toiling buds of snow-covered hills." (Chapter7, Tea-Masters)

この古歌は『南方録』に取り上げられている、新古今集撰者の一人、藤原家隆の和歌である。

又宗易、今一首見出シタリトテ、常ニ二首ヲ書付、信ゼラレシ也、同集家隆ノ哥ニ、

花をのみ待らん人に山ざとの
雪間の草の春を見せばや (覺書)

この和歌は鈴木宗保・宗幹(1971)によれば、『南方録』の解釈同様に、花やもみじの美しさに惑わされないで、雪深い山里に美を見出したとしている。深い雪の下に草の芽が1つ2つ力強く萌えだしている。内部には、最も力の充実した声明の美しさがあるというのである。侘び茶の持つ積極性、肯定性を読み取っている。

この点について、渡辺保は「花」を「得道」と解釈して、次のように述べている。

「花をのみ待らん人」とは茶事について、あるいは人生について「得道」をひたすら願っている人であろう。そういう人にだけ「雪間の草の春」を見せたいという。「雪間の草の春」とは、ほんの少しの芽であり、可能性であり、それは現実の春ではなく、春の幻想、春への思索である。この可能性への思索というところが、定家の歌[見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦のたまの秋の夕ぐれ]の完成度とは違う。利休はそこに自分の進む道を見出したのである。(戸田勝久、編、1999、p.207)

このように天心は茶の湯に認められる審美主義あるいは芸術性と民主主義あるいは平等性、そして精神性あるいは創造性を、世界に問うたのである。田中秀隆が指摘するように、天心が日本文化、特に茶の湯に認めた上記の特性が、全てそのまま受け止められたわけではなかった。ちょうど天心の「アジアは一つである」(『東洋の理想』)という、本来は文明や文化に通低する特色を述べた言葉が、後に第二次世界大戦の日本の行動を正当化する論理として用いられたように、上記の内の芸術性が日本国内でも歓迎され、『茶の本』の日本語訳の出版と相まって、その後の茶の湯の方向を規定していくことになる。

海外へ向けて茶の湯の意義を発信する場合に、次の3点の説明が必要であったと田中秀隆はいう。

伝統文化が、近代に対応を迫られたのは、次の三つの位相と考えられる。第一は、知的に明快な答えを要求する知識的位相である。第二は、その文化活動を近代社会の職業カテゴリーに再編する産業的位相である。第三は、日本を世界の中に位置づける世界システムの位相である。第三の世界システムの位相は、知識的位相、産業的位相を含みこんだ重層構造を含んでいる。(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999、p.140)

そして、天心の『茶の本』は、内村鑑三や新渡戸稲造と並んで、世界システムレベルでの知識的課題に答えたという位置づけが可能だとしている。つまり、フェノロサに協力し、後に、日本の芸術に関係する社会システムを構築していった天心が、『茶の本』において5章「芸術の鑑賞」(Art

Appreciation) という章まで設定して、茶の湯の芸術的価値を説明した。芸術という位置づけは、それまで海外から理解がたい儀式とも思われたであろう茶の湯を、知的に理解可能なものとして世界システムに組み込むことになった。

日本国内では、茶の湯は、明治維新以後に、藩の茶道指南という社会的地位と文化的位置づけを失って、市井によく行われた遊興の茶とは異なる意義づけが求められていた。一指斎千宗守は明治6年に残した口上書に遊芸的茶道への否定的な認識を示している。近代的な芸術観に立つ天心の『茶の本』は、こういった潮流の中で、茶の湯に説明原理を与えたことになる。明治39年(1906)に*The Book of Tea*は出版されたが、その後、昭和4年(1929)に日本語訳『茶の本』が岩波文庫に収録された。これは、『茶の本』の内容が、日本国内においても求められた説明原理を含んでいたからである。

この茶の湯の芸術としての位置づけによって、一方では茶の湯を演劇と比較するということが、試みられることになる。渡辺保は「茶事の演劇性」(戸田勝久、編、1999)において、茶事を英劇の要素と詳細に比較している。「寄付き」「露地」「茶室」に見られる非日常の舞台性、「道具組」の語る物語、「亭主と客」「点前」の演技性、などである。しかし、表層的に幾らかの共通点は認められるとはいえ、その目指すところが演劇とは異なるのではないかと結論付けている。

他方、芸術鑑賞の対象を保護するという、文化財保護の目的意識が、近代数寄者と呼ばれる、明治・大正・昭和初期の富豪に見られるようになる。実業家としても大きな成功を収めた、益田鈍翁は、古美術の収集を文化財保護として位置付けている。また、近代に始まり、現代にも続いている茶会の様相の変化も、芸術鑑賞という考え方に起因する。つまり、現在茶会といえば、お寄せ茶会と呼ばれる、並べられた茶道具の鑑賞を中心とした形態になった。

このように、茶の湯の芸術鑑賞の面が強調されることで、天心も指摘していた、精神性や創造性、東洋の民主主義と表現された、寄合い文化の継承が、茶の湯の実体として取り残される結果を招いている。

5 「市中の山居」の世界性——露地と茶室

侘び茶を支える装置が露地と茶室である。周知のように、露地は都市の中であって、深山を模した世界を作る。茶室もまた、一見、藁葺の小屋のような様相である。これを「市中の山居」と呼ぶが、『淡交』2009年8月号の「美の巨人、利休を語る」の鵬雲斎千玄室と山本兼一の対談において、ヨハネ・パウロⅡ世が茶室の事をイタリア語で「市中の山居」と言ったと記されている。これは、堺の町衆が茶道の境界を「市中の山居」と表現したと、ロドリゲス『日本教会史』にあることが、伝わっていることである。

熊倉功夫「茶道論の系譜」(熊倉功夫、田中秀隆、編、

1999)によれば、露地のイメージを山中他界観の概念で早くに指摘したのが、将に鵬雲斎千玄室氏であった。

深い山中に別世界があるという観念は世界中の多くの民族に見出せるが、ことに東アジアでは、さまざまな信仰や文化と結びついて普遍的である。桃源郷のごとき仙境を一時、市中に出現せしめようとするのが茶の湯の理想であった。(同、p.15)

大阪城築城の折、秀吉がその曲輪構成に山里を設けていた。中村利則「武家の茶室」(中村利則、編、2000)によれば、山里からの内堀に架かる反橋は極楽橋と呼ばれ、「森ノ中」と称された。都市のなかに田園の理想景を造り込む山里の虚構は、侘び茶の環境形成に強い影響を及ぼしたとされ、「市中隠」が数寄の張本とされるようになったという。その後も秀吉の城郭に山里は欠くことがなく、江戸城西の丸山里にまで継承されたとされる。

小屋のような風情の茶室について、岡倉天心は『茶の本』において、古代の日本家屋の様相が再現されたものとして捉えている。伊勢神宮が現在に至っても、20年に一度再築されることが典型的な例であるが、日本に荘厳な仏教寺院が建築されるまでは、住居は一代限りのかりそめのものという考え方であったというのである。

The rebuilding, every twenty years, of Ise Temple, the supreme shrine of the Sun Goddess, is an example of one of these ancient rites which still obtain at the present day. The observance of these customs was only possible with some such form of construction as that furnished by our system of wooden architecture, easily pulled down, easily built up. (*The Book of Tea*, Chapter 4, The Tea-Room)

「市中の山居」の世界性を論じたのが、川勝平太「茶の文化と文明」(熊倉功夫、田中秀隆、編、1999)である。英国人の暮らしに特有の物産複合である、アフタヌーン・ティーと、日本人の暮らしに特有の物産複合である侘び茶との、歴史的関連性を詳らかにしたのである。まず、総合文化あるいは物産複合としての侘び茶と生活景観としての「市中の山居」を取り上げている。

それ [わび茶]は茶・陶磁器・数寄屋建築・茶懐石料理・露地・待合・華道・書道にいたる食住・物産複合をなしていた。特に注目したいのは、わび茶の成立とともに「市中の山居」という独特の生活景観が成立したことである。それは市中にありながら山中に居住するような離俗的な生活空間である。(同、p.110)

17世紀末、元禄時代は茶道の影響を受けて、江戸を始め各地の城下町で、園芸が盛んになり、庭園や坪庭が営まれ、市中の山居あるいは第二の自然が日本の都市文化になっていた。川勝によれば、この日常生活文化がヨーロッパに伝えられていた。ドイツ人学者エンゲルベルト・ケンペル（1651～1716）が1690年から1692年までの日本滞在の記録を残しているのである。そして、ドイツ語の原文が出版される前の1727年に、英訳本『日本誌』(*The History of Japan*)が公開されたという。

18世紀英国では、それまでのコーヒーハウスに代わって、ティー・ガーデンが営まれ、英国独自のティー文化が形成されていく。そういった契機が日本の茶の文化の影響ではないかというのが、川勝の主張である。

英国における風景式庭園の歴史が十八世紀の茶の歴史と軌を一にした事実は注目されるべきであろう。庭と茶とは、茶の文化において一体であり、英国式庭園はヨーロッパ大陸の幾何学式庭園とは異なり、風景式庭園といわれる。風景式庭園の典型は日本である。いまだ仮説の域を出ないが、英国における茶の普及と英国式庭園との相関を想定できるであろう。(同、p.122)

川勝は次のように述べて、かれの議論を締めくくっている。日本の国土そのものも、日本文化の真髄を以てデザインするという、理想である。

近世日本のつくりあげた茶の文化の生活景観が「市中の山居」であり、それは誰の目にも美しく、求心力を備えており、模倣を許す普遍性をもっている。その本質的要素である茶・庭・社交が一体になって英国に広まり、紅茶文化の花を咲かせた。しかし近代日本の生活からは山里の要素が失われた。第二の自然である庭（市中の山居）の美しさは今や英国式庭園より劣るのではないか。とすれば、紅茶文化の受容にも成功した現代日本の茶の文化の課題は、緑茶・紅茶の両文化の原点である「市中の山居」の景観を取り戻すことにあるのではあるまいか。都市民の生活に山里（庭）をとりもどし、また山里に洗練された市中の文化を広めることは、現代日本の新しい国づくりの課題でなければならない。(同、p.130)

最近になって「里山」を日本ブランドのコンセプトとして、世界に発信しようという動きがある。上記の想いが、形を変えて実現しつつあるのかもしれない。

6 観光と旅のミニチュアとしての茶の湯

6.1 観光の未来

旅は、人類の始まり以来、おそらくはその属性のようなものであったのかもしれない。周知のように、現代科学は、人類の祖先がアフリカで生まれ、同じ遺伝子を受け継ぎながら、ここまで世界に広がったことを示している。農耕文化を得て、定住がはじまって、日常と旅が区別されるようになった。聖地を目指す巡礼などの歴史を経、産業として認められるようになって、観光と呼ばれるようになった。日本では早くも江戸時代に、現代のパックツアーのような様態があった。伊勢参りはよく知られているが、高野山では山伏が資金集めのために、一般の人々をガイドとして案内したという。

観光は、石森秀三「観光革命と二〇世紀」(石森秀三、編、1996、pp.11-26)にもあるように、20世紀の交通通信手段の発達とグローバル化による、いくつかの革命的契機を経てきた。第1の革命は19世紀中ごろとされる。鉄道網が整備された時期である。ヨーロッパの有閑階級が、エジプトやアフリカ、インド、中国など、植民地化された世界の各地域を訪れた。第2の革命は1910年代とされる。第1次世界大戦によってアンシャンレジームが崩壊し、アメリカが台頭した。自動車の生産が急速に伸び、中産階級が生まれた。かれらは、大型化された客船を利用してヨーロッパへ旅行した。ヨーロッパ各地には政府観光局が開かれた。第3の革命は1960年代とされる。ジャンボジェットが就航し、マスツーリズムが盛んになった。

このマスツーリズムは観光産業の振興や交流の拡大の陰で、発展途上国を観光による新植民地主義に巻き込んだとされる。また、各地に自然破壊や汚染、伝統の衰退や崩壊をもたらし、犯罪の増加も招いている。そして石森は2010年代にアジアにおいて観光の爆発が起こる、第4の革命を予測している。

この来るべき第4の革命では、既に述べたように、高田公理は観光が描くべき未来の図式として次のような回路を提示している：①想像力(imagination)、もしくは広い意味での好奇心とその充足、②情報刺激の切断によるニルヴァーナ(涅槃)への願望=癒しへの志向性、③変容した自己の表出。想像力を満たしていくのは、民族に根差した文化や、自然環境や、文化遺産である。また、ニルヴァーナ(涅槃)は様々な意味でのパラダイス、あるいは自由に満ちた都市において具現していくとされる。

6.2 茶の湯——凝縮された時空

前節で述べたように、観光の未来の求められるものは、想像力(imagination)、もしくは広い意味での好奇心とその充足、情報刺激の切断によるニルヴァーナ(涅槃)への願望=癒しへの志向性、変容した自己の表出である。ここでは茶の湯の真髄である茶事を取り上げ、それがあたかも旅のミニ

アチュアのように、上記の要素を満たす装置になっていることを見ていく。

また、この議論は、変容した自己の表出を満たす要素を、茶道の議論に組み込むこととなり、これまでの茶道論に欠けているとされる、身体性を包含できる。茶の湯がその点前を大きな構成要素とするにもかかわらず、その身体性は学術的には手つかずであったが、ようやく光を当てることができるようになったと言えるだろう。

茶の湯は、『南方録』にも繰り返し言われているように、火をおこし、湯を沸かし、茶を喫するだけのこととされ、その過程で亭主と客が心を通わせるのだとされる。しかし、これまで見てきたように、茶事が行われる露地や茶室は、その目的のために意匠を凝らしたものである。その露地や茶室が、利休のころのものをそのまま伝えているのと同様に、茶事もまたほぼ、原型をとどめて、今日に至っている。

茶事の進行はおよそ、次のようにまとめられる。季節や時間帯によって、様々な異曲があるが、正午の茶事と言われる、およそ4時間のものがプロトタイプと見ることができる。

<茶事の構成>

- ・待合寄付
- ・初座（初入り）：露地「迎付け」(沈黙の出会い)
 - 水（下露）の合図
 - 茶室（初炭、懐石）[床・掛軸]《陰の性格》
 - 露地 水（中水）
- ・中立：腰掛
- ・後座（後入り）：露地 音（銅羅）
 - 茶室（濃茶・薄茶）[釜・花入れ]《陽の性格》
 - 露地「送り礼」(沈黙の別れ)
 - 水（立水）
- ・待合寄付

山里を思わせる露地を通して、外界から遮断され、彩光もほとんどない茶室に入る。床飾りは墨蹟等の掛軸である。初座では、亭主は炭をつぎ、懐石をふるまう。一度露地の腰掛に出て、準備を待つ。その間の合図は水をまく音である。後座の合図は銅羅である。茶室は少し明るくされ、床も花に改められている。濃茶と薄茶がふるまわれ、茶室を出た露地では無言で別れる。

道具組は何らかのストーリーを持っていて、想像力や好奇心を満たす。露地と茶室は、ほぼ無言の進行とあいまって、ニルヴァーナ（涅槃）に導く。亭主も客も、茶の湯の世界にのみ通じる「茶名」が象徴する、俗世とは離れたキャラクターであり、変容した自己表出を満たす。

このように、茶の湯あるいは事象としての茶事は、観光に

求められる要素を、あたかもミニアチュアのように、満たしているのである。

7 おわりに——「もう一つの日常」を求めて

ここで議論したように、利休の大成した侘び茶が、思索のトポスを求めるものであり、「市中の山居」と呼ばれる仕掛けによって、それが実現された。また、その意味が様々な変容をとげ、岡倉天心らによって再確認されながら、今日に至っている。そして、これはまさに観光の未来に求められるとされる、想像力やニルヴァーナ（涅槃）や自己表出を満たす装置であった。そして、自己表出の要素を、茶道の議論に取り込むことで、これまで茶道論に欠けるとされてきた、身体性を取り込むことになった。

現代は、生活がレジャー化し、日常と非日常の境界がなくなりつつあるといわれる。であるからこそ、侘び茶で試みられた、「もう一つの日常」としての仕掛けが希求されるのではないだろうか。伝統は絶えざる革新の連続であるといわれる。侘び茶の形、あるいは侘び茶を構成する要素の、現代での新しい形もまた、工夫される余地があるのかもしれない。自然の四季の体感や実感の経験なくして、道具組やしつらえに表われる、茶の湯の創造性は深く理解できない。また、利休のころには日常であった、炭や釜はもはや日常ではなく、当たり前なものに囲まれたなかで、何かが際立つという創造性を感じることはできない。そして、当時は誰もが出来たであろう、畳に正座をするという動作そのものが、外国人ばかりでなく、現代の特に若い日本人世代では、もはやアクロバティックな訓練を要する所作である。日常性と自然の中に、「もう一つの日常」を実現し、至高の時をもたらした侘び茶のしつらえ、あるいは装置を、現代の意味においてどのように工夫すれば再現できるのか。あらゆる創意をもって、取り組む意味があるように思う。茶の湯をノスタルジアや興味本位のみ終わらせてはならない。

参考文献

- 久松真一（校訂解題）1975、『南方録』、淡交社、京都。
- 菱本芳明、2009、「山口玄蕃の茶会：記号として読む茶会—『宗湛日記』より」『淡交』8月号、第63巻 第8号、64-68。
- 堀内國彦（編）千宗室（監修）2000、『茶の湯と科学』茶道学大系第八巻、淡交社、京都。
- 井口海仙（著）綾村坦園（書）1973、『利休百首』、淡交社、京都。
- 井伊正弘、倉沢行洋（校訂解題）1988『一期一会（1）井伊直弼茶書 入門記・茶湯一会集・茶湯をりをり草』燈影撰書7、一燈園燈影舎、京都。
- 石森秀三（編）1996、『観光の二〇世紀』二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容3、ドメス出版、東京。
- 久保田淳、1981、『明恵上人集』、岩波書店、東京。
- 熊倉功夫（校注）2006、『山上宗二記 付 茶話指月集』、岩波書店、東京。
- 熊倉功夫、田中秀隆（編）千宗室（監修）1999、『茶道文化論』茶道学大系 第一巻、淡交社、京都。

- 中村利則（編）千 宗室（監修）2000、『茶室・露地』茶道学大系
第六卷、淡交社、京都。
- 西山松之助（校注）1995、『南方録』、岩波文庫、岩波書店、東京。
- 岡倉覚三（著）村岡博（訳）1929、『茶の本』、岩波書店、東京。
- 岡倉天心（著）千宗室（序と跋）浅野晃（訳）1998、『茶の本 *The Book of Tea*』、講談社インターナショナル、東京。
- ポール・ヴァレー（編）千 宗室（監修）2000、『海外の茶道』茶道学大系 別巻、淡交社、京都。
- ロラン・バルト（著）篠田浩一郎（訳）1975、『サド・フォーリエ・ロヨラ』、みすず書房、東京。
- 鈴木宗保、鈴木宗幹、1971、『裏千家茶の湯』新独習シリーズ、主婦の友社、東京。
- 竹鼻圭子、2006、「もう一つの『半林庵』」、大手前人文科学部論集、第6号、93 - 104。
- Takehana, Keiko, 2007, "Another Hanshoan tea hut" *Journal of Otemae University Department of Humanity* No. 7, 101-112.
- 谷端昭夫（編）千 宗室（監修）1999、『茶道の歴史』茶道学大系
第二巻、淡交社、京都。
- 戸倉勝久（編）千 宗室（監修）1999、『茶事・茶会』茶道学大系
第三巻、淡交社、京都。

受付日 2009年 9月24日

受理日 2009年10月15日

